

アメリカ・アラスカ州との姉妹交流30年の継続

佐呂間町 前町長 堀 次郎

堀 次郎(ほり じろう)氏



昭和13年7月 石川県金沢市生まれ
 昭和20年8月 大阪より佐呂間村浪速へ両親と開拓者として入植
 昭和42年3月 帯広畜産大学獣医学科卒業
 昭和42年4月～44年4月 十勝清水農協(獣医師)勤務
 昭和44年5月～53年3月 佐呂間町農業共済組合(獣医師)勤務

昭和53年4月～63年8月 堀家畜医院開業
 昭和51年8月～59年6月 佐呂間町議会議員(3期)
 昭和63年9月～平成20年9月 佐呂間町長(5期)

*主な団体歴

平成11年5月～20年9月 網走支庁管内町村会会長
 平成19年5月～20年9月 北海道町村会副会長
 平成9年4月～20年9月 北海道簡易水道等環境整備協議会会長
 平成18年6月～20年9月 全国簡易水道協議会会長 など

はじめに

一九八〇年、佐呂間町はアメリカ・アラスカ州のパーマ市と姉妹都市提携が成されて今年で三〇年を迎えた。そもそも、この始まりは、当時佐呂間高校で英語の教師をしていた石黒 睦弘氏とアラスカ州・パーマ市在住の新聞記者エドワード・ホームズ氏がアマチュア無線を通して親交を深めていた事が縁となり、二人がそれぞれの首長や議会に働きかけて姉妹提携を提案したところ、それぞれの議会において姉妹提携の議決がなされたのである。思い起こせば丁度その頃は、日本においても世界各地の市町村との姉妹交流の機運が非常に高まっていた時期でもあった。

しかし、往々にしてこの手のプロジェクトは一過性に終わってしまい、長続きしない例が多いが、幸いにも我々の市町での交流事業が三〇年間、一度も途絶えることなく継続されてきた事は実に意味があるものと思う。その大きな要因として考えられることは、一つに、毎年、双方の子供達(中学生)の短期留学を取り入れ、子供達に国際人として視野の広い人

間に成長を願うこと。二つには、双方において必ずホームステイでの受け入れによって親子のコミュニケーションを重視したこと。三つ目には、これは我が町における独自の取り組みであるが、中学校の語学指導助手（以下AETと記す）については、必ずパーマ市から優秀な人材を派遣してもらうことであった。

三〇年の間には、文化や言語、更には、生活習慣の異なる人達の交流の中では様々なエピソードもあったので、記憶を辿りながら幾つか紹介してみたい。

交流の目的は子供達の将来の

夢に繋がるものでありたい

私が初めて姉妹都市のアラスカ州・パーマ市を訪問したのは、一九九〇年七月下旬から八月月上旬であり、この年は姉妹提携十周年にあたる記念すべき年でもあった。

私達は、当時の議長・町民代表並びに高校生を合わせて十六名での訪問であったが、カーティー市長を始め多くの人達の歓迎を受けた。そして、市主催による十周年記念式典並びに歓迎会が行われた。更に、このときには佐呂間高校とパーマ高校との姉妹校提携の調印も行われたのである。私はカーティー市長とこの記念すべき十周年を一つの節目として、今後、どのような交流を進めて行くべきかについて、忌憚の無い話し合いをおこなった。話し合いの中では経済交流・人材交流・文化交流などの様々な提案がなされたが、最終的には両市町の交流を通して双方の中高生の交換留学をサポートする事で意見がまとまったのである。

更に、私からの要望として、現在は道教委から各市町村に派遣されて



1990年7月
初めてパーマ市を訪問
カーティー市長と市役所にて

いる外国人によるAETを直接パーマ市から優秀な人材の派遣を依頼した。と言う事は道教委からのAETの派遣を受けると人件費は道で負担してもらえが、受け入れ側の市町村では、その人選が出来ないため、私は信頼できる優秀な人材確保のために姉妹都市からの派遣を要望したのである。カーティー市長は快く私の要望を聞き入れてくれた。その結果、現在で六人目のAETが二〜四年間勤めもらっているが、彼等の総てがパーマ市からの派遣であり、何れも素晴らしい人材で、生徒は勿論のこと町民からの信頼も厚い。また、佐呂間でのAETを希望する若者も多く、明年の九月からの後任も既に決つていとの報告を受けている。そのことの成果の一つだと思われるが、近年になつて二人の高校生が相次いで一年間のパーマ高校への長期留学に挑戦している。子供達の行き先が姉妹関係にある所だけに安心して子供を手放せると親達は喜んで

いる。パーマ高校からも三人の長期留学生を受け入れたが、彼等は何れも素晴らしい社会人となって活躍していることは非常に嬉しい。

市長が自らAETとして三カ年の滞在

実は私が二度目にパーマ市を訪問したとき、初めに派遣されたAETの期限が残り少なくなったため、カーティー市長に後任のAETをお願いしたところ、彼曰く、『私の市長としての任期が明年の八月で終わるので、次回は市長には立候補せずAETとして佐呂間に行きたい』とのこと。私はてつきり冗談だと思い改めて聞いたところ彼はまじめな顔で、是非行きたいとの強い希望であったため彼に三カ年間AETを努めてもらった。

欧米における比較的人口の少ない市町村（人口約一万人以下）の首長は自分の本業を持ちながら、ある面ではボランティア的な感覚で首長の任務を果たしている所が多く、パーマ市もそうであった。従って、議会の開催は常に五時以降に開催され、報酬は日当と僅に事務的に必要な経費のみで、日本の制度とは大きな違いがある。

そもそも、カーティー氏の本業はパーマ市に事務所があるアラスカ州津波研究所の副所長の職にありながら、彼は市長と議長の役割を果たしていたのである。

はからずも彼はAETとして一九九七年二月に奥さんと来日し、三カ年余りをAETとしては勿論のこと、奥さん共々佐呂間の住民に親しまれ、素晴らしい功績を残し、現在も姉妹都市交流事業に対しての最大の理解者として多大な貢献を果たしてくれている人物である。



1998年8月
パーマ市・佐呂間町友交記念モニュメントの前
でグノーティー市長と

ホームステイと合併浄化槽

姉妹都市交流を始めて最初に戸惑ったのはホームステイの受け入れ先であった。諸外国においては比較的气楽にホームステイを引き受けると言われると聞いていた。しかし、当時の日本では他人を長期間家に泊めると言うこと、それも相手が言葉も通じない外国人となれば、なかなかOKしてくれる家庭は多くないのが現実であった。我が町も決して例外ではなく、当初は大変苦勞もあつたが、最近では自分達の子供もパーマ市民にお世話になつていくこと、更に、生活環境が整備された事もあつて、積極的にホームステイを引き受けられる家庭が多くなつたことは嬉しいことである。

交換留学事業を始めて間もない頃のことであるが、忘れられない出来事があった。それは、ある酪農家が自分にも同じ年頃の娘さんが居たため、パーマ市から来た女子中学生のホームステイを快く引き受けてくれたのである。しかし、どうしたとか彼女の様子がどうもおかしいとの連絡を受けた。彼女がホームステイしている酪農家は私の知人でもあり、素晴らしい家族なのにどうしたものかと、英語の堪能な女子職員に様子を見に行かせた。戻ってきた職員に話しを聞くと、その家庭のトイレが、当時の北海道の農村では当たり前の汲み取り式のいわゆる『ポツチャントイレ』であったため彼女は何としてもトイレで用が足せなくて、ほとほと困っていたことが分かったのである。

私はその話を聞いて大きなショックを受けた。それは、我が町においても国際交流を積極的に進めておきながら、他人が気楽に宿泊できないような農村の生活環境にある現実を実感したからであった。

当時、佐呂間町ではまだ一般並びに集落下水道が完備されておらず準備の段階であった。そのようなことがあったため町としては一般下水道事業並びに集落下水道事業と合わせて、住宅が散在している農漁村地域対応の合併浄化槽事業をも並行して急ピッチで事業化を進め生活環境整備に取り組んだ経緯がある。一般下水道事業や農漁村集落下水道事業は補助事業で実施でき受益者の直接負担はないが、合併浄化槽での個人負担は一世帯約七〇万〜一〇〇万円位となるため、これは町からの助成を行い普及の促進につとめた。現在、佐呂間町では約八〇〇戸近くの世帯が集落地域外に点在しているが、その半数以上の四二〇余りの世帯で合併浄化槽が設置されている。このことは留学生の受け入れだけの問題ではなく、後継者の花嫁対策や更には高齢者世帯の生活環境の整備からも極めて重要な対策であることは言うまでもないが、この事業の推進には

国際交流による背景も少なからずあったと思われる。

姉妹都市における公式訪問は カップルで行くのが望ましい

近年日本もそうであるように、諸外国の要人が各国を訪問するとき、夫人同伴が常識となっているが、我々市町村長や議長が姉妹都市を公式訪問するときも、私は夫人同伴が望ましいと常々思っていた。私が初めてパーマ市を訪問したのは丁度姉妹提携十周年記念行事が行われた年でもあった。

その行事にはS議長も出席することに成っていたので、私は議長に対して、旅費は議長のポケットマネーで奥さんとの同伴をお願いした。議長は快く承諾してくれたが、奥さんは『私は絶対に行きたくない、言葉も習慣も違うし、ましてや他人の家に泊るなんて出来ない』と言うので町長から説得して欲しいと議長から逆に頼まれてしまったのである。私は何度か議長の家を運び、説得をした結果最終的には『町長さんを一生恨みまますからネ』と言われたが承諾はしてくれたのである。私もしぶしぶ承諾してくれた彼女が果たして楽しい旅行になるのかと、おおいに心配であった。彼女は飛行機の中も、アラスカに着いても、何となく不安な表情のままホストファミリーに迎えられホームステイによるアラスカでの生活がスタートした。

しかし、『案ずるよりも生むが易い』と言う諺の通り、彼女は二〜三日もするとすっかり元気になり、信じられないほどに明るく、ホストファミリーとも昔からの知人のように振舞っている姿を見て安堵した。

このときは、一行十六名で、私の妻を含めて三夫婦が一緒であったが、



2004年7月
パーマ市 シティーマネージャー
スーラック夫妻と

誰一人途中で帰りたいと言い出す者はなかった。そして、十日余りの滞在を終えて帰国するときあれほど来る事を嫌がっていた議長の奥さん曰く『お父さんは先に帰って！私はもう少しここに居たい！』と言った程であった。また、私はT議長ともパーマ市を訪問したことがあったが、T議長の奥さんも全く同じであった。

ちなみに、パーマ市からの訪問者もカップルが多く、双方において素晴らしいコミュニケーションが生まれ、奥さん方の果たしてきた役割も大きいものがあつた。

姉妹交流三〇周年記念行事を終えて

昨年で三〇周年を迎えた記念行事は佐呂間町で開催された。パーマ市からはコムズ市長夫妻を含めて二一名（内高校生五名）の訪問団が佐呂間を訪れた。一行はそれぞれの家庭にホームステイをしながら有意義な時間を過ごした。そして、今後とも末永く友好の輪を広げ、少しでも世界の平和に貢献できたらと願ったしだいである。

この三〇年の間には交流事業に携わり、全面的な協力を惜しまなかった多くの方々の中には既に他界された方も居られ、時の流れを感じた。私ごとになるが、私が初めてパーマ市を訪問するとき行政間の関係を揺ぎ無い物にしようと約束した当時のシティーマネージャーのスーラック氏とはその後も家族ぐるみでの交際を続けてきた。そして、彼も昨年の三〇周年で佐呂間に来る事をことのほか楽しみにしてが、その願いも叶えられず、八月十二日に亡くなり、まさに兄弟を亡くした思いであつた。

今日まで両市町を合わせて、六〇〇人を上回る人達が双方を訪問し、非常に強い信頼関係が生まれた事は大変意義深いものを感じる。



2010年7月
姉妹提携30周年記念行事のあとで

私が町長在職二〇年の間にパーマ市では四人も市長が交代したが、何れの市長も佐呂間を訪問し、特に若い世代（中高生）における交換留学プロジェクトの継続の重要性を訴えていた。町は中高生の留学に際しては、交通費とホテル代に要した経費の半額を助成している。なお、引率の教諭については町が出張旅費の全額を助成している。と言うのは中学校・高校の先生方にもネーティブな英語に出来るだけ接してもらい生徒達の英語教育に対して意欲的に臨んで欲しいとの願いであった。しかし、どうもその意図が十分に理解できていない教師も居た事から、ここ数年中学生には町の職員による引率を試みたところ、予想以上に職員の意欲と能力の向上が見られたことから、今後は出来るだけ多くの職員にこのような機会を与える事が望ましいと思った。

おわりに

中出常務さんに依頼され、私の町長在職二〇年の間で特に印象に残った事例について思い出しながら四回に分けて投稿させていただきました。いま、書き終えて振り返って見たとき、私の文章は何れも本誌の目的とする主旨とは掛け離れ、貴重な誌面を汚してしまったのではと大変申し訳なく思っているところがあります。

さて、いま日本の農業、特に北海道農業を取り巻く環境は極めて厳しい状況にあります。

第一次産業、取り分け農業の停滞は国の滅亡を意味する物と私は信じています。

貴研究所のご活躍の元、北海道農業の今後益々の充実発展を願って止みません。